昭和58年6月6日
中外日報 (第三種郵便物認可) (14)

文鮮明 世界基督教統一神霊教会 教祖の提唱

日韓トンネル研究会が発足

国際ハイウエー構想の第一歩

名誉会長に松下正寿氏

会長は佐々保雄 北大名誉教授

世界基督教統一神霊協会の文鮮明教祖が、一昨年、韓国ソウルで開かれた第十回「科学の統一に関する国際会議」で提唱した「国際ハイウエー」構想の具体的試みとして、去る五月二十四日、東京・紀尾井町のホテル・ニューオータニで、「日韓トンネル研究会」設立総会が開かれた。

「国際ハイウエー」構想とは、世界各国を結ぶ高速輸送のネットワークをつくり、世界経済の統合をおしすすめ広範な経済の発展を可能にして、飢餓、疾病、戦争からの解放と、平和と幸福に満ちた理想世界を実現する」というもの。その手はじめとして設立された日韓トンネル研究会は、日本と韓国を結ぶ海底トンネルをつくる上で必要な地質、環境等の調査や技術、設計施工の諸問題を検討し、日韓トンネル建設の技術的可能性と経済的効果を日韓両政府に示し、その協力を得られるようにすることを目的としている。

日韓トンネル計画は、戦前、日本の国鉄技師により、日本を起点に、韓国からアジアを経て英国までを鉄道やトンネルで結ぶという「中央アジア横断鉄道」の一環として計画され、その一部の調査も行なわれた。しかし、これは敗戦とともに挫折し、その後、大手建設会社の大林組がPR誌『道』の中でユーラシア・ドライブウエー構想を提言したが、今回の日韓トンネルはこれらの構想を踏まえている。

全長百九十一㌔余りの同トンネルには三兆円を超える工費と、二十年の歳月が予想される。同研究会では学者・専門家による分科会を設置し、研究を進めていく予定で、呼びかけ人代表には、文教祖が創立した世界平和教授アカデミーの会長松下正寿元立教大学総長が就任している。

また、日韓トンネル研究会会長に北海道大学名誉教授で青函トンネル（昭和六十年完成予定）の技術顧問でもある佐々保雄氏が就任したことも注目される。

当日の総会では、松下正寿氏が「最大の困難は政治的困難、人間関係の困難であるが、これを超えずしては実現しない。平凡な表現かもしれないが、和の精神をもって乗り越えるしかない」と挨拶。

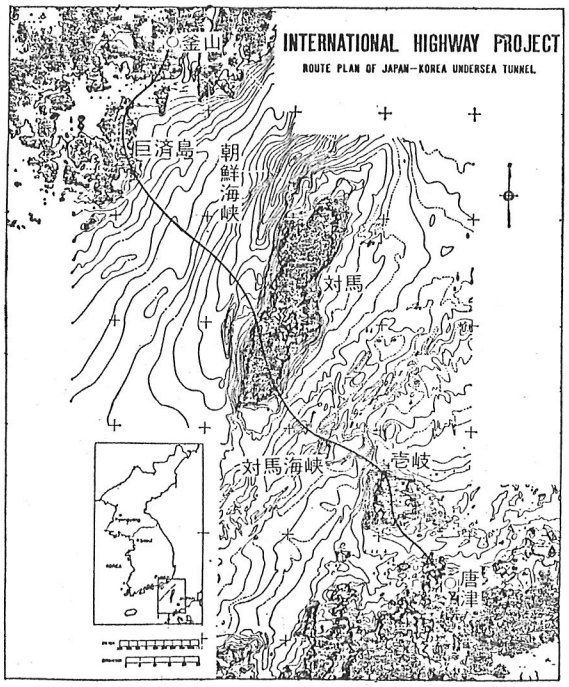
会長に就任した佐々保雄氏は「日韓トンネルに、日本が世界に奉仕し、平和の道を築く第一歩としての価値を見いだしている。固い決心と勇気を持って、実現に当たりたい」と抱負を述べた。

斯界の権威揃う

幅広い役員メンバー

役員は次の各氏。

名誉会長＝松下正寿（元立教大学総長）▽会長＝佐々保雄（北海道大学名誉教授）▽副会長＝梶栗玄太郎（国際ハイウエー建設事業団理事長）、金山政英（元駐大韓民国日本大使）、佐々木忠義（前東京水産大学長）▽顧問＝岡田實（元大阪大学長）、景山哲夫（近畿大学長）、久保木冠光（国際文化財団理事長、日本統一教会会長）、高田源清（九州大学名誉教授）、山田伴次郎（前宇都宮大学長）▽監事＝本島信（弁護士）▽理事＝相原安津夫（九州大学助教授）、小山田秀生（国際文化財団副理事長、日本統一教会副会長）、尾脇璋一郎（世界平和教授アカデミー事務局長）、北原正一（株式会社熊谷組専務取締役）、紅林茂夫（国際経済研究センター理事長）、小関幸治（株式会社熊谷組顧問）、桜井設雄（国際ハイウエー建設事業団常任理事）、清水馨八郎（千葉大学教授）、高坂柴朗（株式会社奥村組顧問）、高橋正吾（新日本気象海洋株式会社代表取締役）、高橋彦治（八千代エンジニヤリング株式会社取締役）、辻田時美（北海道大学名誉教授）、飛岡健（現代人間科学研究所所長）、島羽欽一郎（早稲田大学教授）、中川学（一橋大学教授）、中村信夫（システムデザイン研究所所長）、那須聖（外交評論家）、平野敏行（東京大学教授）、福田泰三（サンコーコンサルタント株式会社常務取締役）、古田元男（株式会社ハッピーワールド社長）、松山貞三（国際ハイウエー建設事業団常任理事）、宮崎政三（日本物理探鉱株式会社常務取締役）、宮脇昭（横浜国立大学教授）、持田豊（鉄建公団海峡線部長）、李健（政治経済評論家）。

統一教会の国際ハイウエープロジェクト

日韓トンネル計画図